

発掘調査に向けた準備

3月末、イギリスから帰国してすぐに取りかかる必要があったのは、8月に予定されているイスラエルでの発掘調査に関する諸準備だった。発掘調査を行うのは、イスラエルの北部、下ガリラヤ地方に所在するテル・レヘシュ遺跡。2006年に日本の調査団が発掘調査を開始して今年がちょうど10周年だ。調査も今回が10シーズン目となる。第I期(2006～2010年)の発掘調査は、置田雅昭・天理大学教授(当時)が最初の団長となり、その後を月本昭男・立教大学教授(当時)が引き継いで大規模に行われた。2013年に始まった第II期の発掘調査は桑原が団長を務めている。

春学期の授業やその他の業務が始まるのと同時に、科学研究費の書類作成、イスラエル考古局への発掘ライセンス申請など、さまざまなデスクワークを大急ぎで進めなければならず、各方面への連絡や予算の調整、渡航の手配といった作業も今回は例年以上に手こずった。しかし、現地スタッフの考古学者イツハク・パズ博士(イスラエル考古局)やその他のスタッフと連絡を取りながら、調査団の体制をなんとか整え、4月23日には上智大学で、4月29日は天理大学で、「発掘調査計画発表会」を開催し、イスラエル専門の旅行会社とタイアップして、発掘調査ボランティアの募集を開始することができた。

会場には、考古学、聖書学、宗教史学、歴史学などに関心をもつ40人以上の学生たちが集まり、想像を超える大人数に調査団スタッフ一同を驚かせたが、連休明け、実際にボランティアの申し込みを行ったのは、総数28名(25名の学生と3名の社会人)となった。昨年の調査に参加したリピーターの顔もある。ここ数年で最も規模の大きな賑やかな調査となりそうだ。6月半ばには、発掘調査ライセンスも交付され、7月に入ると、春学期の授業終盤の忙しさと、渡航直前の慌ただしさが重なった毎日が続く。遺跡のある場所は、自然景観が保護された国立公園内にあるため、山火事などに備えた保険に加入して、その支払いもしなければならない。

学期末の試験と採点を終えた7月28日、いよいよ日本を出発し、同日深夜、テル・アヴィブ空港でイスラエルに入国し、下ガリラヤ地方のキブツ・エンドールに到着する。キブツの人々は、いつものように、日本隊の一行を温かく迎えてくれる。キブツとは、ユダヤ教的、社会主義的なイデオロギーを背景にもつ共同社会的なコミュニティーで、その歴史は20世紀初頭に遡る。調査団の基地となるキブツ・エンドールを含め、現在では多くのキブツで世俗化が進み、共同主義的な側面は薄れているものの、キブツ独特の生活スタイルは残っていて、キブツの構成員全員が集まって食事ができる食堂などの施設が存在する。調査団一行の3週間を越える共同生活が、いよいよこれから始まるのだ。キブツ内には、調査団の倉庫もあり、各種の機材や道具、これまでの出土遺物もぎっしり収納されている。

発掘調査団の毎日

宿舎のオフィス設置、遺跡の発掘調査区設定などの準備作業

を行った後、7月31日、テル・レヘシュの第10次発掘調査がついに始まった。発掘作業中の調査団の朝は早く、朝4時過ぎに起床して、身支度を調べ、まだ真っ暗なキブツを



テル・レヘシュの発掘調査風景

車で出発する。キブツから遺跡までは、車で約20分だが、途中からは、舗装のない山道が続く悪路となる。遺跡の麓に車を止め、テルの頂部をめざして少しの山登りをする。機材や道具を担いでいるので、テルに登るだけでも大変だ。テルというのは、アラビア語やヘブライ語で、丘を表す言葉なのだ。

5時30分、テルの頂部はまだ薄暗く、準備体操や道具の準備をしているうちに、だんだん空が白んでくる。今年度の調査区は、大きく2地区に分かれていて、学生や社会人のボランティアたちは、エリア・スーパーバイザーの指示のもと、各地区に分かれて発掘作業を開始する。「つるはし」や「じょれん」で土を崩して集め、バケツで運ぶ。やがて、地面から建物の壁の石組みが姿を表し、土器などの遺物が次々と見つかるにつれて、小さな道具を使って、慎重に作業を進めなければならない。ボランティアたちの多くにとっては慣れない作業で、最初は苦労をするが、次第に慣れて腕が上がり始める。

発掘作業が捗るはかどのは、日が高くならない早朝の時間帯で、朝9時に、朝食の休憩となる。イエス・キリストが白く輝く姿に変容したとされるタボル山を眺めながら、テルの上で賑やかに食べる朝食は、健康的で、楽しい一時だ。朝食が終わると、太陽が高く昇り、厳しい暑さが襲いかかる時間帯になる。空気が乾燥しているため、知らないうちに汗をたくさんかくので、水分の補給も怠ってはいけない。ただし、各調査区には、日よけのネットがかけられていて、厳しい日差しを避けて作業を行うことができる。朝食を準備したり、日よけのネットを設置したりしてくれるのは、調査団のロジスティックを担当する現地協力者のツァヒ・ガル氏だ。

11時過ぎには作業を終え、手分けをして、調査区の記録を取りながら、道具を片付けて、テルを下山する。午後の時間帯は猛烈な暑さで、野外での発掘作業は行わない。車でキブツに戻り、12時30分、キブツの食堂で昼食を取ったあとは、少しの自由時間で、それぞれ、シャワーを浴びたり、洗濯をしたり、昼寝をしたり。夕方4時になると、今度は、テルから持ち帰った土器などの出土遺物を水洗いして、選別する作業が待っている。午後7時、キブツの食堂で夕食。7時45分、全体ミーティング。そのあと、調査団スタッフのみのミーティングがある。やがて夜が更け、飲み物を囲み、現地の友人たちや新たなメンバーたちとの交流を温める時間帯となるが、明日の作業に差し支えないよう、節度を保つ必要がある。